



昭和2年7月7日創立

世田谷区立東大原小学校

同窓会報

平成26年度 第1号
(平成26年7月発行)

発行所
世田谷区大原1-4-6
東大原小学校同窓会

発行人
野地勝彰

ますます盛んな同窓会活動

同窓会長 野地勝彰(二十四回生)

四月十三日の総会では学校、PTA、おやじの会の皆様のご協力をいただき二百名を超える参加者で無事盛大に終了することができました。張さん(二十二回生)には新中学生か



ら八十歳代の方までを対象に内容のあるご講演をしていただき、またその後の懇親会で大いに旧交を温めていただきました。講演内容は別稿をご覧ください。

戦前に二宮金次郎像を寄贈していただいた方のお嬢様方もご参加くださるなど同窓会総会はいろいろな回顧と邂逅の場となっています。

こうした活動も多くの会員皆様による財政面でのご支援を始めとするご協力によるもので感謝申し上げます。とともに今後共よろしくお願い申し上げる次第です。

今年には四十七名の新会員を迎え、卒業生は一万二五四名となりました。また今年には校長、副校長両先生が交替されました。離任された大野校長、大橋副校長両先生には、在任中は同窓会のために大変お骨折りいただきましたありがとうございます。

着任されました片山校長、青鹿副校長両先生とはこれまで以上に連絡を密にして母校の教育環境向上に向けて活動を続けて参ります。特に二年後の学校統合に向けてメモリアルルームなどの施設の面や同窓会が学校に残した寄贈品の継承など、学校とよく話し合いの上進めて参りますので校長先生にはよろしくお願い申し上げます。

統合に向けては三同窓会一緒になって沢山の課題を検討して行かなければなりません。遅くとも来年中には結論を得るように今年からスタートさせます

皆様のご意見をお寄せください

平成二十八年四月から統合により新しい名前の学校になります。同窓会として新校への活動をどうして行くのかを検討中です。理事会では「今まで通り東大原小学校に對して行った活動を新校にも継続して行おう」という意見が多いのですがこの点について皆様のご意見を是非伺いたくこの場を借りてお願い申し上げます。これ以外でも統合後の同窓会のあり方や活動についてなどご意見、ご感想をお待ちします。送付はファックス、手紙またはEメールで、同窓会連絡先(十一頁記載)宛てお願いいたします。

新しく着任した片山校長先生より

本年度、第二十四代校長に着任いたしました片山裕治です。着任に当たって

歴代の校長先生方より、祝福をいただきました。その方々のお話しに同窓会のこと、がしばしばあり、疑問でした。しかし、四月十三日(日)の総会に出席させていただき、疑問は解消しました。本校同窓会は、活動が活発であるばかりか、会員お一人お一人が「学校を良くしよう」「東大原の子どもをみんなで育もう」との思いがあり、結束していることがあの会場で伝わってきたからです。



平成二七年度に東大原小の名称は八八年の歴史をもつてなくなりませんが、東大原小学校同窓会と皆様の学校愛は、永久に不滅です。ね。

平成26年度定例総会議事内容

第一部 総会議事

議案第1号 平成25年度事業報告

次頁掲載

議案第4号 平成26年度予算案

(単位:円)

議案第2号 平成25年度決算報告および監査報告 平成25年度決算報告 平成26年3月31日 (単位:円)

収入の部	予算額	決算額	支出の部	予算額	決算額
会費収入	450,000	631,000	活動費	400,000	585,840
寄付金収入	700,000	850,300	会報費	270,000	263,970
新会員入会金	5,000	4,700	総会・懇親会費	50,000	45,306
懇親会費	60,000	66,000	通信費	300,000	296,306
預金利息収入	0	194	文具等消耗品費	110,000	121,251
卒業生名簿販売	0	0	振替費用負担	40,000	50,520
80周年記念誌販売	0	0	振替用紙代	0	3,100
当年度合計	1,215,000	1,552,194	当年度合計	1,170,000	1,366,293
前年度繰越金	1,753,403	1,753,403	次年度繰越金	1,798,403	1,939,304
合計	2,968,403	3,305,597	合計	2,968,403	3,305,597

収入の部	26年度 予算額	25年度 決算額	支出の部	26年度 予算額	25年度 決算額
会費収入	600,000	631,000	活動費	490,000	585,840
寄付金収入	700,000	850,300	会報費	570,000	263,970
新会員入会金	4,500	4,700	総会・懇親会費	65,000	45,306
懇親会費	60,000	66,000	通信費	30,000	296,306
預金利息収入		194	文具消耗品費	130,000	121,251
			郵便振替込込料負担	55,000	50,520
			郵便振替用紙代	3,300	3,100
当年度合計	1,364,500	1,552,194	当年度合計	1,343,300	1,366,293
前年度繰越金	1,939,304	1,753,403	次年度繰越金	1,960,504	1,939,304
合計	3,303,804	3,305,597	合計	3,303,804	3,305,597

活動費明細	金額	会報費明細	金額
東日本大震災義援金	30,000	印刷代(H25.7発行 1,500部)	110,985
同窓会文庫(図書寄贈)	109,235	印刷代(H26.3発行 3,000部)	152,985
新入生・卒業生記念品	147,920	合計	263,970
二宮金次郎石像修復及び立看板	192,360	通信費明細	
同窓会HP維持管理費	57,435	会報発送メール便代(3,366件)	269,280
寄付金(下北沢阿波踊り)	10,000	事務局PAV基本料等	27,026
寄付金(校庭キャンプ)	10,000	合計	296,306
寄付金(アトプ ロジェクト東大原)	10,000	文具等消耗品費	
寄付金(校庭餅つき大会)	10,000	会報発送用封筒代(4,500枚)	58,160
その他経費	8,890	同窓会文庫用ネット代	28,190
合計	585,840	コピー費(用紙代、外付け代)	25,248
		SDカード、領収書用紙代	9,653
		合計	121,251

主な明細

	活動費		会報費	
	予算額	前年実費	予算額	前年実費
同窓会文庫	130,000	109,235	印刷代 (7月1,500部)	120,000
卒業生記念品	150,000	136,920	印刷代 (3月3,000部)	152,985
新入生記念品	10,000	11,000	会報メール便代 (7月900通)	75,000
震災義援金	30,000	30,000	会報メール便代 (3月2,500通)	205,000
寄付・協賛金	50,000	40,000	合計	570,000
HP管理委託料	70,000	57,435		533,250
その他	50,000	*201,250		
合計	490,000	585,840		

*前年実績の「その他」には、二宮金次郎修復費192,360円が含まれている。

平成25年度監査報告

決算書類を慎重に監査した結果いずれも

適正且つ妥当なものとして認めます。

平成26年4月1日

監事 礒 正格
福士 木綿子
斎藤 耕一

議案第3号 平成26年度事業計画

次頁掲載

議案第5号 東大原小学校同窓会 会則 改訂の件

- (第2条) 従来同窓会の正会員は、東大原小学校の卒業生に限定していましたが、東大原小学校に在籍したことがあり、同窓会に入会を希望する者に変更します。
- (第6条) 役員ならびに職員定数について、実情に合わせて添付の通り変更します。
- (第7条) 総会を「定例総会」と「臨時総会」に定義づけをします。
- (第8条) 役員を選出は、従来の会則では、定例総会で選ばれた評議員が互選で選ぶことになっていましたが、これだと総会を一時中断して評議員会を開催しなければならぬため、「直近の評議員会で次期評議員候補者を選出し、その評議員候補者により次期会長・副会長・理事・監事の選出を行い、定例総会に提示する。」方法に変更します。評議員候補者が、定例総会で選出された場合には、役員も評議員の互選により選出されたものと見做すことにします。
- (各条) その他、漢字ひらがな表記の統一、一部字句の訂正を行いました。

四月十三日に母校体育館に於いて同窓会総会が開催されました。一部では野地会長、片山名誉会長の挨拶に始まり、新入会員(八十七回生)田尾佳音さんと窪田浩介さんの元氣な挨拶があり、引き続き議事に入りました。議事の詳細は上の記録及び三ページをご覧ください。まずは事業報告、決算報告があり、引き続き本年度の事業計画と事業予算の報告があり承認されました。また特別事業として本年は同窓会会則の改正がありました。今まで不備だった点、文言上不適切だった点が見直されました。そして最後に来賓代表挨拶、校歌斉唱をして総会議事を終了しました。

第二部では二十回生のトヨタ自動車名誉会長の張富士夫さんによるお話しがありました。東大原小学校、梅ヶ丘中学での思い出、そして現在日本体育協会会長として努力なさった東京オリンピック誘致の苦労談。そして校歌にある「良き日本人」の言葉に触れて、張さんが若いころ触れた「よき日本人」として「二人の大野さん」のお話を頂きました。感銘深いお話でした。

終了後は皆で会場を片づけ、ビールを片手に和気藹藹の時間、同窓会って素晴らしいなと感じた一日でした。

前頁議案第一号にあります昨年度の同窓会活動内容と議案第三号にあります本年度の活動計画に就いて補足説明させていただきます。

平成二五年度の活動

(一) 会員名簿の作成及び会報の発行は二四年度同様、年二回の会報作成を実施。第一号は会費納入者対象で約一五〇〇部、第二号は五十五歳以上で住所が判明している会員全員対象で約三千部を印刷・発送した。その結果年会費納入者は平成二四年度の五二八人より四・二%増加し、二五年度は五五〇人。現時点での同窓会員総数は一万二二五四名、住所の分っている人は五、二六三名。会費寄付納入者は一〇・五%。

(二) 母校の教育環境の向上について、平成二五年度は以前からの懸案だった、二宮金次郎の石像を修復建立した。

また二四年度に引き続き、母校、PTA、おやじの会、校庭開放委員会、商店街、下北沢成徳高校等とのコミュニケーションを図り各種催しに参加協賛した。また平成二三年度から始まった同窓会文庫にも今年度は六三冊を寄贈。累計で二八五冊の寄贈となった。

また、二四年度に引き続き、新しく同窓会員になる卒業生に対して『三年日記』を、新しく一年生になった新入生には、縄跳びの縄を贈った。また同窓生のご厚意に甘えて、古くなって傷んでいた朝礼台を修復した。

(三) 同窓生や地域の親睦を図るための事業では、春の親睦ゴルフの会と秋の親睦旅行を二四年度に引き続き実施した。

その他東日本大震災の被災者に対する義援金は、昨年度と同額の三万円とし、日本赤十字社を通じて寄付した。

学校統廃合の話が出て以来、同窓会としても説明会へは毎回出席し、意見を述べた。また守山

小学校の跡地利用に関する打ち合わせ会にも毎回出席をしている。

平成二六年度事業計画

(一) 同窓会の運営については二六年度は新たに平成二八年四月の学校統合により校名も変わるの、今後の同窓会をどのようなものにするのかを検討する。守山小学校、北沢小学校の関係者とも連絡を取り、今までに卒業した同窓生と今後新校から出てくる新同窓生についての考え方をまとめる。

会員名簿の作成および会報の発行、HPの充実についてより良い同窓生の交歓の場とすべく二五年度に引き続ききめの細かなフォローを行う予定。

(二) 母校の教育環境の向上については二五年度に引き続き、母校や学校関係諸団体とのコミュニケーションを継続して行う。

そして各種学校関連行事への参加、協賛、同窓会文庫充実、新入同窓会員及び小学校新入生の記念品贈呈を継続する。

(三) 会員の福利厚生

秋の親睦旅行と春の親睦ゴルフは、引き続き実施する。地域の方々を含め、会員の幅広い参加を図る。

(四) その他

地域行事へ積極的に参加し、地域の発展に協力する。大震災義援金は今年度も継続する。

また学校統廃合の動きでは、政治的な動きには巻き込まれないことを前提に、同窓会の軌跡が残るよう活動する。

総会風景

総会では三十三回生の鈴木春樹さんが素晴らしいカメラの腕前を發揮、沢山の素晴らしい写真を撮ってくださいました。一部を紹介します。



張富士夫さん（二二回生）講演

平成二十六年四月十三日東大原小学校同窓会総会

先ほどのお話しをお聞きしましたが、あと二年ほどで東大原小学校の名前がなくなってしまうとのことで、大変さびしい気持ちがあります。またそういう大変お忙しい時に私を呼んで頂けたことを有難く思っています。

今、新卒業生の二人から大変しつかりとしたご挨拶を聞いて感心したのですが、お二人とも梅ヶ丘中学へ進学なされたと聞き嬉しく思いました。私も随分前ですが、梅中に通っておりました。梅中は今でもそうですが、北沢警察署の前にあります、そこに剣道の道場があり、若いお兄さん達が竹刀を振り回して叩き合っているのをよく見ていました。私は中学を卒業して駒場高校に行ったのですが、女の子ばかりでこれは大変だと思い、北沢警察署の道場風景を思い出しまして、すぐ走って行き、そこから剣道を始めたわけですから、先ほど司会の方からご紹介がありましたように、その時始めた剣道がどういう関係か今の剣道連盟の会長に繋がりと、合わせて体育協会の会長まで引き受けることになっています。

実はその前にトップリーグ連携機構というものがありまして、その会長を前の森総理がやっておられ、副会長になつて欲



張富士夫さんと一緒に校歌を歌った張富士夫さん

しいという話がありました。「何をやるんですか」と聞いたら「ボールゲーム例えばバレーとかバスケットとかの球技の一部リーグを統括し、審判育成だとか訓練所の充実などを行う組織」とのことでした。「球技は全く素人ですから」と言ったのですが、当時トヨタグループが球技の一部リーグに沢山参加しており、その関係もあるから是非と言われやむなくお引き受けしました。真面目に出席しておりましたら、五、六年くらい前ですか、あるときまた森先生が訪ねて来られて、「体育協会の会長を引き継いで欲しい」と言われ、それまでは経済界のことばかりやっていたのですが、こちらもお受けすることになり、今では体育協会の会長を務めることになっています。そういうこともございましたので最初に最近私が関係しましたオリンピックのことを御報告しておきたいと思えます。

三年前にオリンピック誘致にもう一度挑戦しようということが決まり、それから活動がスタートしました。オリンピックの開催地を決める選考委員と言うのは各国一人か二人、全体で一〇〇人くらいおられるのですが、そういう方がどんな方かということは何も知らないし、何を準備しなければならぬかということも全く分かりませんでした。それでまず自分の出来ることからやろうということで、私は関係者の中でただ一人の経済界出身者でしたから、経団連に行つて「なんとか経団連にスポーツ委員会というものを作つて欲しい」と頼みました。なんとかそれは聞き入れられて、社会貢献部会の下にスポーツ部会という組織を作ってもらいました。これはオリンピック誘致が決まりました後、格上げされて経団連スポーツ委員会になりました。

ロンドンのオリンピックも見に行きました。

ロンドンオリンピックを引つ張つた方がたまにたまブリテイッシュペトロリアムの副社長で、私どもが仕事の関係で存じ上げていた縁で来日された折に、イギリスがどのようにしてロンドン誘致に成功したのかについてお話を聞かせていただきました。

そうこうしているうちに、去年の春にオリンピック委員会から訪問チームが来ることになりました。日本ではどのくらいの準備が整っているか、交通はどうか、治安や安全性はどうかというようなことの調査に来たのです。そのチームに対するプレゼンテーションをした際、私は体育協会の会長と言う立場でプレゼンテーションしたつもりだったので、意外なことに終わってから各委員の方々からは、オリンピックのことよりも自動車の話ばかり聞かれました（笑）。「自分の国のトヨタディーラーの社長の誰々は友人だが知っているか。是非一緒に写真をとつてくれ。彼に見せたい」とか、ある国の女性委員は「私はトヨタの車に乗っていて、いま三台目だがとてもいい」とか話されて、大変和やかな雰囲気につつまれました。それから何日か後に、ACCJというアメリカの商工会議所の日本にある組織から、スピーチの依頼が来て、そこで話をしましたら、ACCJからオリンピック委員会に推薦状を書いておいたからという話になりました。最初は何をやっていいのかわからなかったのが、だんだん自分のやれることをやればいいんだという思いに変わっていききました。

そして、最後に去年の九月ブエノスアイレスへ行ったのですが、最初に竹田委員長から言われていたのは、当日本番のプレゼンテーションもお願ひしますとのことでした。弱つたなど思ったのですが、なるようになるかと覚悟していたところ、直前になりました、申し訳ない

けれど当日のプレゼンテーションから、前日の新聞記者へのプレゼンテーションに回ってほしいということになりました。

皆様もテレビで見たと思いますが、素晴らしきプレゼンテーションでしたよね。あれはイギリス人でプレゼンテーションについて詳しい指導をしてくれた方がいたんです。その彼が「最後のプレゼンテーションは七人です。女性三人、男性四人にしたい」と主張したんですね。それまでの案では女性二人に男性四人だったのですが、私が新聞記者へのプレゼンに回り、女性を三人にすることになったのです。

あの時もし私が出ていたら落ちていたんではないかと思えます。(笑)

最後の最後になりました。安倍総理もいらつしやいましたし、文部科学大臣や多くの政治家、経済界、スポーツ関係者、官公庁の方々など、新聞などでよく名前を拝見するような方々が沢山集まって来られてみんな一生懸命、本当に一本になって四日間は日本に票を入れて頂くための運動をしました。あまり派手にやっちゃいけないのですが、投票権のある委員の方と晩御飯を一緒に食べたりもしました。これだけ皆が集中して完全に一本化してやるのは初めての経験だなと思いましたが、結果として大差を以て日本に誘致をすることが出来たのです。そういう場所に居合わせたという事が出来て本当に幸せだったと思えました。ただ私は財界から入っているせいなのか、勝つたといつても飛び上るほど喜びを表すなんてことは考えてもいなかったんですね。私は佐藤真海さんの隣にいましたが、「ジャパン」と言われた瞬間にみんな飛び上って喜んで、私は座ったままの万歳だったので、あの時に出新聞の写真には私の挙げた手首だけが写っています。(爆笑)

帰って来てからみんなに「いないじゃないか」と言われたのですが、「この手が俺だ」と説明



しました。あのとき大勢のスポーツ関係者はみんな大粒の涙を流して喜んでいました。それを見て、自分にはもう一つ情熱が足りなかつたのかなと思えましたね。いずれにしても大変素晴らしい結果になって嬉しく思っています。

さて、いま日経新聞の私の履歴書にトヨタ自動車の大先輩の豊田章一郎氏が執筆なさっていますよ。今日の記事は初代のクラウンがアメリカに持って行ったら全然売れなくて、失敗してしまつたという話でした。あれは何かと申しますと、あの頃は時速100kmで車が走れる道が日本になかつたのです。私も入社後五年くらいで運転免許をとりましたが、当時でも時速60kmくらいしか走る道がありませんでした。その時代クラウンを出し日本で評判が良かったものから、これをアメリカに輸出しましたが、全然売れなかつたのです。どれだけ踏み込んでも時速100kmの速度まで加速しないんで、危なくてハイウエイに入っていないというのが原因でした。

それが一九六四年の東京オリンピックで東名、名神という高速道路が出来て、時速100kmで走れる道が日本にも出てきたのです。こうなると自動車会社の開発競争は凄まじいもの

で、昭和四十一年にカローラを出して四十二年にコロナを出して、これがアメリカで大変売れたのです。そういう意味で、トヨタ自動車にとつてもオリンピックは大変ありがたい風を呼んでくれたイベントだったのです。

ですからいまの若い方達も色々な形で今度のオリンピックに関わり、そのもたらす変化や影響を肌で感じて、何十年か後の後輩たちにその経験を話してあげて欲しいと思います。実は、今日皆様にお話しを申し上げるのに、どんなテーマにしたらいんだらうと悩んでおりました。それと申しますのも、会場には卒業したての若い同窓生がかなりいらつしやる。そして私と同年代くらいの先輩方もいらつしやる。どういふ話をしたらよいかと悩んでいましたら、野地会長から若い皆さんの将来の為に役に立つような話をテーマとして考えて欲しいというお話を頂きました。

ちよつと硬い話になるかもしれませんが、「次代を背負う若者へのメッセージ」と言うのと大げさですけど、私が育つたトヨタ自動車の生い立ちについて少しお話ししてみようかなと思つてまいりました。これはトヨタの宣伝ではありません。むしろ世界では大変遅れてスタートした日本の自動車産業が、どのようにして今の様になったのかという話です。本当について最近の話なのです。

トヨタ自動車の創業は一九三七年でございます。私が生まれた年です。なんだ七十七年前なのかという感じの話なのです。そのなかでゼロからスタートした日本の自動車会社なのですが、トヨタ自動車の先人達がどのようにして自動車産業を起こしたかという話をしてみたいと思います。

先ほど一緒に歌った校歌にいい言葉がありましたね。「よき日本人わが願い」ですか。私も一緒に仕事をして見てきましたから我々

の先輩は本当に戦ったんだな、「よき日本人」だったんだなという実感があります。

トヨタのこれまでの歴史では初めての十数年大変な時代があったのですが、ここに来ましてようやく世界で一千万台くらいの販売ができるようになる、生産量で世界一の座を占めるようになるかも知れないというくらいまでになりました。

それからレクサスという高級車を作って十年くらいになりますが、我々は長年ドイツのベンツに対抗するような高級車を作るのが夢だったのです。レクサスが今、ベンツと良い競争をしているのを見て、何とかゼロからスタートした自動車産業も世界に追い付いてきたというのがいまの現状ではないかと思えます。その追いつく迄の話をさせていただきます。豊田喜一郎氏と「二人の大野さん」という話です。

私が会社に入ったのは昭和三十五年ですが、当時大野修二さんという副社長がおられました。それから役員の一番下、平取というのですがそこに大野耐一さんという方がおられました。このお二人はともに自動車工業の発展に大きな役割を果たされた方なのですが、あまり知られていないこともあり、私にとつての「よき日本人」であります。

三月二十日過ぎにテレビで「リーダーズ」という二日連続の放映がございました。一部ドラマ仕立てになっていましたが事実に基づいた話です。それから先ほど申し上げましたように豊田章一郎さんが私の履歴書をお書きになつています。ここ最近トヨタの歴史がマスコミにも出て来ましたので、私もそれに乗って、話をさせていただきます。

トヨタ自動車というのは日本の発明王と言

われた豊田佐吉の息子の喜一郎氏が作った会社であります。喜一郎氏は最初は豊田自動車織機に入つて、自動車織機の技術者として仕事をしています。喜一郎氏から、九十年前にはイギリスから自動車織機最終製品のパテントを買いに来るといふようなこともあり、事業が順調に軌道に乗つていたのです。当時、佐吉と喜一郎親子はよくアメリカやヨーロッパに行っていました。向こうでものすごくたくさん自動車が走っているのを見て、次は自動車の時代になると考えたのです。しかし日本には自動車メーカーは一つもなかったのです。このままだと日本中が外国の自動車に抑えられてしまう。なんとか日本人の頭と腕で自動車産業を興さなければならぬと考えたのでした。

ベンチャービジネスと言えればかっこいいですが、当時よくそんな冒険に乗り出したなど言うのが私の率直な思いです。私は若いころ土地買収の仕事をしていて、ある人から聞いたことがあるのですが、豊田喜一郎氏は豊田市で自動車事業を始めるに当たり、六十万坪の土地を買ったといひます。

六十万坪ってめちゃくちゃな広さの土地ですが、まずその中の二千万坪か三千万坪を使つて工場を作っています。あとは原野とか林でした。どうしてこんなにも買ったんだらうと思いましたが、その後どんどんその土地がテストコースになったり技術部になったりということ、あつという間に埋まっていたのです。そういう意味では喜一郎氏には先見の明があつたのです。これは土地の話ですが、同じように外国から自動車を買つてきて、分解して図面にして作つてみるということも始めたわけです。

その喜一郎氏が昭和十二年にトヨタを作る時に、いろいろなところに向いて、自動車産

業を興すのに協力してくれる方々を口説いて回つたのです。

一番最初に招いたのは神谷正太郎さんと言つて、私が会社に入つた時は販売の神様と言われていた御年配の方で、当時は日本GMの販売部長をやつておられた方でした。その方を口説いて、何も無いところからトヨタ自動車の販売網を作つて頂いたのです。トヨタ自動車に入つたら給料は二分の一になつたとよく言つておられました。

今日お話しする副社長だった大野修二さんは、東京で自動車修理の工場を三十名くらいの社員を使つて社長をやつておられたそうです。そこへ喜一郎氏が来て日本の産業の為に力を貸してくれと口説かれて、会社をたんで豊田市にやつてきたそうです。やつぱり給料は三分の一になつたそうです。

よくもあんな田舎に來られたなあと思うのですが、それが昭和十二年のことです。私は昭和三十五年入社ですから、その当時から二十三年経つておりましたが、その時でも私がトヨタに就職を決めたとき、学友たちからなんであんな田舎に行くんだと言われました。昭和三十五年でもそんな時代でしたから、昭和十二年でのその決断は凄いなと思ひますね。

大野さんは何をされた方なのか。自動車というのは大体七割は他の会社から購入する部品で構成され、自分のところで作るのは三割くらいのもので。ですからいくら自分のと



ころでしつかりやっても、後の七割が力なかつたり品質が悪かつたりすればが、いい自動車は絶対に出来ないのです。この大野さんは入社するとすぐ愛知県下の鍋や釜を作つてするような会社をまわり、この部品を作つてもらえませんか、必要な事は色々ご指導しますからといって、多くの部品メーカーを育てた人なんです。

それをずっと続けて、八年経つたら日本は敗戦となりました。戦後はトヨタにとつて大変苦しい時期で、事業は続けたのですが、あのころは日本を復興させるためには鉄鋼と石炭に注力して、自動車の様な贅沢品は重要でないというような政策があつたので、なかなか資材が入手できなかったそうです。

物資統制で材料が買えないわけですから部品メーカーさんは部品を作ろうにも原料が入らず、下手をすれば潰れてしまうという事態になつていたのです。やつとお金を貯めて設備を買つて技術を身につけたところで敗戦になつたのですが、材料が入らないという厳しい状況でした。

そこで大野さんは、率先して闇の資材を買つて部品メーカーに供給したのです。それが警察にバレて捕まつて牢屋に入れられたそうです。そうしたら豊田喜一郎氏があの当時では大変高価なビフテキやとんかつ弁当などを差し入れたそうです。そして大野さんが出所して帰つてきたら「本当にご苦労様でした」と言つて出張手当を出したそうです。(笑)統制令はなかなか終わりませんでしたが、大野さんはそれから闇の資材購入と供給を続け、再度捕まつたそうです。

私が入社したころは自動車も売れ始めていまして、統制令もなくなつていました。部品メーカーの結束が大変強いのに驚いた記憶があります。ここまで大野さんが育ててきた成果なのだと思います。

生き証人と云えるかどうか分かりませんが、私どもの会社のそばに小島プレスという会社があります。その玄関に入ったところに大きな看板があつて、そこに「トヨタ自動車の恩を絶対忘れてはならない」と書いています。どういふことなのか聞いてみたのですが、小島プレスは最初は名古屋市内でプレス事業をやつておられました。戦争末期に名古屋も空襲を受けるようになり、このままでは空襲でやられてしまうのではないかとこの心配があつた時、トヨタからたぶん大野さんからだと思ふのですが、「豊田市に引越していらつ

しやい。そこは危ないから」という話があり、実際に引越しを決めたのです。しかしトラックの心配がつかなくてなかなか移動が出来なくて困つていたら、大野さんが五十台のトラックをいっぺんに集めてきてくれて、豊田市に二日か三日で引越すことが出来たのだそうです。そしてその直後に名古屋は大空襲を受けて、小島プレスの元の工場は全焼してしまつたのだそうです。あの時大野さんがトラックを貸してくれたら、うちの会社はもう世の中には無かつたんだ。そのトヨタ自動車の恩を忘れては絶対いけないんだ、と言う話でした。話を聞いたとき、そういうことが損得抜きに当たり前のよう出来るというのは、大野さんも小島プレスさんも凄いなと思ひました。

先日武道館の鏡開きで松永館長にお会いした時、館長が「トヨタの強さの秘訣は三河の精神ではないでしょうか」とおっしゃつたのですね。「それは何ですか」と聞きますと「それは家康の時からそうだけれど、主君と家来といえども家族的な結束が強い国柄だ」とおっしゃいました。なるほどサプライヤーとメーカーの結束の強さにトヨタの発展の秘訣があるのかと認識したのですが、その元を作られたのは大野さんだったのでした。

喜一郎氏は昭和二十七年、志半ばでお亡くなりになりました。創業十五年、一生懸命やつて部下を育てたところで、何もまだいい結果を見ずにお亡くなりになつてしまわれませんでした。

以前私に大野さんがいつも使つていたポロポロのかばんを見せて話してくれたのですが、その中に喜一郎さんの写真が入つていて、「こゝろやつて私は喜一郎さんと毎日一緒に仕事をしているんです」と言つて、ポロポロ泣かれるんですよ。感動しましたね。そういう風にしてサプライヤーを育ててきたのが副社長の喜一郎さんでした。

もうひとりの大野耐一さんですが、この方は今ではトヨタ自動車を超えて、新しい日本の生産方式を作つた方として世界的に有名な方です。私が入社した時はトヨタはまだ悪戦苦闘していた時代でしたが、私はこの人の下に配属されたのですが、物凄く怖い人でした。今パワハラという言葉がありますが、その三乗四乗くらいで、なにしろそばに寄れなかつた人でした。そこへ部下として入れられたのです。

最初に怒られた話が副社長の喜一郎さんと関係があるので少し話します。

私は大野さんの部下になる前一年ほど生産管理の仕事をやつていたのです。新しい部品を作る際に、その製造をトヨタ自動車内でやるか外に外注に出すか、その案を作る事務局として仕事をしていました。私が最初に仕事を始めたときに教えてくれた生産技術の係長は、「お前は総務部から来て製造のことは何も分からないから教えておくれよ、こういうやり方にくる量が少ない部品は、中に入れると生産効果を阻害するから外注に出せ、それが会社の為だ」と懇切丁寧に教えてくれたものです。

私はそういうものかと思ひやつていましたが、大野さんの部下になるや否や「何を馬鹿な

ことやっている！」とまづやられてしまったのです。なにを叱られていいのか全然わからない。よその会社にもやりにくいものを出して自分のところにもやりにくいものを入れれば安く出来るし効率も上がるとつい思っていたのですが、無茶苦茶おこられたのです。そのとき、「この人って、もしかするとうちの会社とよその会社の区別がついていないんじゃないか」と思いましたね。明治生まれの人ですから、初めのうちは理由も何も言ってくれないでただ叱るのです。

そのうち先ほど言いましたように、七割が外注品で三割しか内部で作っていないのだから外注先をいじめてどうして車が安くできるんだなど教わりながら少しずつ勉強していくうちに、これは豊田英二さんも同じような考え方をされていることがわかってきました。要するにこの人達は外注のサプライヤーも内部も前工程と後工程としか見ていないんだということが分かってきました。今になってはよく分かるんですが、その当時はまだ私も課長にもなっていない時代でしたから、ただ大野さんからガンガン言われて相当頭にきたんですが、剣道で叩かれ慣れていましたから我慢してやっていました。そうしているうちに現場の改善をやらねという命令を受けました。新しい部を作った大野さんがやるうとしていることを一緒にやれということでした。その時は流石に自分は事務屋で法律を習ってきたけれど、現場の改善なんてとても任ではありませんといい、上司の部長も心配し、断ってやるうと言ってくれたんですが、全然大野さんが相手にしてくれず、やむなくその部に入ったのです。それから色々な事を大野さんから教えて頂いて、一生懸命現場に取り組み、十五年大野さんの下で新しい生産方式の導入をやりました。

大野さんがおっしゃるには、喜一郎氏は、昭和二十年八月十五日の終戦翌日の八月十六日からラインを動かしたそうです。

その時大野さんもいたそうですが、喜一郎さんが部下たちを集めて、「三年でアメリカのビッグ三に追い付け」という宿題を出したといえます。言われた方は内心あきれはて、困ったといえます。まず金がない、技術がない、設備もろくなものがない。そういうないない尽くしのなかで、どうやって三年で、雲の上のGMやフォードに追いつくんだと本当に困ったそうです。とりあえずみんな現場に出て、どういうことをやればいんだということを、現場を見ながら議論したそうです。

そこで出た結論は簡単に申し上げますと、実際に車を作っている動作だけを集めれば能率はどんどん上がっていくということだったそうです。その時の分析では直接車を作るための動作が少なく、準備だとか後かたづけとか待ち時間等の時間が多かったようです。

それから仕事と無駄と言うことを突き詰めて考え、その無駄な部分を排除していくということを徹底してやるうということになったそうです。

具体的にどんなことをやったんですかと大野さんに聞きましたが、当時はアメリカと日本の繊維産業の生産性の違いは九対一と言われていたそうですが、自動車分野はもっと差がありましたから、十対一の違いがあり、追いつくということは今トヨタが十人でやっている仕事を一人でやるということだと考えたそうです。要するに機械の前で、手待ちで仕事をしない時間を見ても無駄なわけです。その外、仕事をしていても無駄と言うものもある、要するに一時間に一個しか出荷しないものを、まとめて十三個とか十四個作ってしまうとほとんど余って来ます。これをどこかに片づけなければいけないとか、その為にフォークリフトを買わなくてはいけないとか、運搬の人を雇わなくてはいけないとか

車を直接加工する以外の仕事が発生するのです。

こうしてお客様とは関係のないところで、どんどんお金と時間が使われる。こういうものを現場ですっと見ていつて、それを一つずつ直していきました。



その結果を踏まえ、まず機械工場でいろんなことをトライし、それを組み立て工場に本格的に導入しようといういろいろ教えられながら現場を変えて行ったのです。一口で言うところジャストインタイムと自動化の二つの組合せがキーでした。ジャストインタイムとは何かと言うと、欲しいだけしか作ってはいけないということなんです。

ある工程を担当している親方は自分のところの責任でラインを止めるような事があつてはならない、自分の工程の部品が足りなくてよその工程に迷惑をかけては絶対いけないと思ひ込んでいますから、どうしても多めに作ろうとするのです。ところが大野さんが言ったのはそうではなく、ひとつは欲しいだけしかラインを動かさしちゃいかん。一個一分と決めたら、一分以上動かしてはいけないということでした。たしかに親方はすぐに挽回できるように十人でできるところを十二人くらい入れていたんです。それを見直して、

十人で一生懸命やってちやうど必要な数だけ出来るようにしたんです。隠していた在庫なんかばれて出て来ます。みんなブーブー言いましたが、しかし実際にこれをやると倉庫の場所もいらなくなるし、その中で働いていた人が十人、二十人といらなくなりました。フォークリフトもいらなくなりました。大きなパレットもいらなくなりました。「えーっ！こんなにな？」というくらいで、せつせとこれを作れ、あれを作れと指示していた日程係もいらなくなっていました。

私が大野さんに言われたのは、「無駄を発見するには見ているは駄目だ。現場に立っていて目をつぶれ。するとガガガガ、ガガガガという音が出ている、この現場ではこの音が出ている時が真の仕事だ。あとは全部無駄と思え。」でした。本当に三分くらい立っていると、音がしているのは四十秒くらいで、後は音はしないんですね。もちろん音がしなくてもいろいろなくなくてはいらないことがあるんですが、しかし音の出ている作業は準備や後片づけを含めて本質的な製造ではないから、そこに注目して見直せということは理を得ていると思いますね。

もうひとつは前工程で欠品があったり不良が出たりしたら、すぐラインを止めるということとでして。止めて、みんな直すのです。

その直し方も「五回何故何故を繰り返す」という方式で進めました。一回の何故で「ボルトが緩んでいました、それを締めましたからもう大丈夫です」と報告するとひどく怒られるわけです。「何故ボルトが緩んだのか、それはこういう理由でした」と報告すると「それは何故だ？」とまたくるわけです。そうやって何故を五回繰り返し返えして行くと本当の原因が見えてくる訳です。そういうやり方を現場では徹底していたのです。

なんでそんなことを今申し上げるのかと言うと、当時実は大野さんに対して内外から大変、非難・無理解が強く、私も先輩から「お前あんなグループにいて、将来いいのか」とも言われました。特に学会の学者等にとつては、これが全く新しい取り組みで、今までの学界の常識だった、アメリカ生まれの高速生産方式、すなわち早くて多く作るのが一番いいのだという考え方に反するものだったからです。ところが日本は生産する台数もアメリカとは全く違うわけです。昭和二十五年でトヨタは月産七百台、年間八千台くらいです。ところがGMは年間二百五十万台、フォードは百五十万台です。日本はそれだけの台数しかないのに四種類も五種類も作らなくてはならない。要するに多品種少量生産なのです。アメリカと同じようにやったら在庫ばかり出来てしまうのです。

そんなことは外部の学者達は分からないから、「トヨタは理屈に合わないことをやり出した。今までのフォードが生み出した大量生産方式からわざわざ小さく小分けにして、ラインもパタパタ止まっている。こんなことでは早晩トヨタは潰れるだろう」というような記事が出ていたんです。ラインを止める、在庫を持たない、特に悪いのは三百人の組立ラインで、一人の問題でラインが止まれば残りの二百九十九人は遊んでしまうではないかということとで非難を浴びたのです。

こんちくしょうと思いましたがけれども、上層部からは喧嘩をしても何の足しにもならんから一切喧嘩するなと言われていました。それでも若かったですから反論したこともありましたが、そういうことをずっと続けていくうちに、成果が上がり出して、皆の見る目が少なくなりました。

特にオイルショックの時の回復がものすごく

速かったのが評価を高めるのに役立ちました。だいたい在庫なんて持っていないから、止まった時はやりかけたそのままの形で止まるのです。また売れるようになるとそのまま動きだしますから、あまり混乱しないのですが、在庫を大量に

持っている会社は混乱して物が溢れてどこまで進んでいるかが分からなくなっていました。うちが動き出してからもなかなか回復できていなかったサブライヤさんが沢山出て、それを協力して直していきましました。そんなこともあってトヨタの生産方式は段々見直されていきました。

私は十五年大野さんの下にいたんですけれど、それが十六年目になって、アメリカに現地の社長で行かされたものですか、初めてこの方式がアメリカに出て行ったの



です。当初はアメリカの生産方式に反していると言われ、さんざん叩かれたのですが、本当にこんな方式を持つて行ってアメリカでやれるのかというのが、大変な興味を呼んで、私も色々質問も受けました。ところが、実際向こうで何の抵抗もなくすんなり受け入れられて、むしろ成果もあがったので、マサチューセッツ工科大学の先生たちが一生懸命調べだして、本を出してくれたりすることになりました。

大野さんがそこへ行きつくまでは相当の苦難の道だったと思います。昭和五十三年に大野さんが本を出されたのですが、まえがきにこう書いてあります。「なお一部の人のこの方式を曲解しての批判に対しては、弁明釈明は一切致しておりません。世の中の事はすべて歴史が立証すると確信するからです」。

大野さんは平成二年、七十八歳で亡くなっているのですが、去年大野さんの生誕百年のお祝いを歴史を書いている学者先生が集まってやつてくれました。産業革命以来、分業から機械で大量生産に進んできたことに対して、多品種少量生産で作りすぎをしない、全く逆の生産方式の革命が日本で出たということ、ある地位を得たのですね。

私がおかしかったのは、大野さんにノーベル賞を申請したらどうかという話がシンポジウムの中で出ました。別の学者の方も、それぐらいの価値があります。やつてみたいですねとおっしゃるので、吃驚しました。同じ先生ではないからいいですが、昔は殆どの学者先生はトヨタ生産方式を非難していたではないか、今更何をおっしゃいました。今では生産管理の世界では、日本人の手で発明されたこの多品種少量生産の方式は大きな位置を占めるに至ったようです。

私はこの二人目の大野さんには十五年間お世話になり、その間毎日現場で過ごしていましたから、アメリカに行ってもあまり戸惑うことはなかった

です。英語はあまり出来なかったですが、なかなか変な事が起こると、現場にベタッと座り込んであぐらかいて、白墨持ってこいと行って床に絵を描いて、ここはこうだろうとああだろうと絵を描いて説明し議論すると、みんな分かってくれてそれが有名になりました。ケンタッキーの社長はすぐに地面に座って俺たちに教えてくれると言われていましたが、それはみんな大野さんから教えて頂いたことでした。

トヨタ生産方式のことを話し出しますと四日も五日もかかりますので、時間の都合もあり本当に簡単に説明しましたが、こういう人が他にもいっぱいいらっしゃるのです。この人達がいたからこそ、日本の自動車産業の今があるのだと思っています。

たぶん明治以来いろんな産業で、外にいくと分からない、いろいろな事業で心血を注いで今を作り上げた人々が、沢山いたのだと思います。今日は我々世代が先輩から叱られながら、一生懸命教えてもらって少しはお手伝いできたという話をいたしました。これからは色々な技術革新が起ってきます。

IT技術の革新は目覚ましいものがありますし、エネルギー関係では自動車でも燃料電池が開発されています。これは水を電気分解すると水素と酸素に分かれますが、これを逆にして水素と酸素を反応させて、水と電気を作り、その電気を使って自動車を動かそうという研究です。それも実用化できるところまで進んでおり、日本は世界をリードしています。またバイオなどの新しい素材が進んで行く中で、日本はそういう技術をきちんと身につけて、新しいやり方を開発して行かなくてはならないと思います。

それだけにここにいる若い人たちは今後そういうことが要求されるわけです。先ほど歌ったこ



87回生田尾佳音さんと窪田浩介さんより花束贈呈

こに掲げられている「よき日本人、我が誓い」として、世界で互角に戦えるように先輩たちに続かなければならないのです。私もまだまだ頑張ろうとおもいますが、なにせ余命があまり残っていないのですが、あなた達には無限と言っていいくらい時間があるのですから、是非頑張ってくださいと思います。

これは世のため人の為になることに一生懸命取り組んで、またあなた方の後輩にバトンを渡すような「よき日本人」になつて欲しいとお願ひして、私の話を終わらせていただきます。

(拍手)

第三部 懇親会風景



二宮金次郎像の由来が判明しました
 前回の会報でいづろどなたが建立したか分からないと
 書きましたが、今回の総会に、本像を寄贈なさった方の
 娘さんがお二人見えまして判明いたしました。十一回
 生の船木良子さまと
 十六回生の上田潤子
 さまで、娘さん二人
 を第三荏原小学校
 (東大原の前身)で学
 ばせたお父さま熊野
 徳一氏(当時熊野株
 式会社経営)が、昭
 和十年前後に建立寄
 贈なさったそうです。



本同窓会は政治・宗教・思想について
 中立を守ります。

〒155-0031
 世田谷区北沢2-35-9
 小清水ビル5F
 東大原小学校同窓会事務局
 FAX 03-5454-5356
 メール dosokai@higashihara.jp

同窓会への連絡、問い合わせ、
 寄稿の送付、送金の方法について
 現在の事務局の住所は左記のとおりです。
 ご連絡は郵便、FAX、またはメールにて
 お願いいたします。

「東大原小学校の思い出」作文募集
 東大原小学校は平成二十八年四月一日をもつ
 て統合新校となり名称も校歌も校舎も変わ
 ります。同窓会は八八年に渡る東大原小学校の
 歴史を新校に残したいと願い、新校内にメモ
 リアルームの設置をお願いしています。そしてそ
 の中に収納・展示する種々の資料の収集も始
 めています。今回の作文募集はその一貫で、東
 大原小学校での最後の同窓会迄には文集に
 したいと考えています。
 また巻頭で野地会長がお願いした、同窓会自
 体の今後のあり方についての御意見も願
 います。
 皆様の応募をお待ちしています。手紙やFAX
 でもデジタルデータでメール添付でも結構
 です。左記同窓会連絡先へご送付ください。

